HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Ⅰ.日本語のバリエーション
Author(s)	鄭, 恵先
Description	【特集】留学生と日本人学生がともに日本語で学ぶ「多文化交流科目」の創設
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 18, 18-29
Issue Date	2014-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59645
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISCHU18_03.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Ⅰ．日本語のバリエーション

鄭　惠先(チョン　ヘソン)

1.　実践の概要

1.1　開講の背景

本実践は、2012年度後期に北大留学生センター「一般日本語コース」の「アカデミック日本語Ｂ」という科目名で開講が始まった。当初、上級日本語学習者向けで開設された「アカデミック日本語」という科目群は、日本語学習を直接の目的とするのではなく、日本語を使ってアカデミック・スキルを磨くことを目的としたものであった。中でも、本授業は、社会言語学の学際的な視点から日本語を１つの学問の対象として見直し、その上、グループワークを通して論理的思考力、分析力を身につけることを目的とした科目である。

1.2　開講形態・受講者内訳

「多文化交流科目」として開講が始まったのは、2013年度前期からで、前期と後期が同じ内容で構成されている。

本科目の受講人数には、日本人学生10名、留学生10名で最大20名という制限が設けられている。しかし、【表１】の受講者数の詳細からもわかるように、履修登録の時点では定員が満たされていても、とりわけ留学生の中

【表１】学期別受講者の内訳

学　期	受講者数	日 本 人 学 生	留　　学　　生
2013前	10名	４名（文学４）	６名（中国４、韓国・フィンランド１）
2013後	13名	８名（総合理系２、総合文系・工学・農学、文学・医学・法学１）	５名（中国・韓国・フィンランド・タイ・アメリカ１）
2014前	13名	10名（工学３、総合理系２、薬学・医学・獣医学・経済学・農学１）	３名（中国２、カザフスタン１）
2014後	10名	９名（文学・教育・工学２、水産・総合理系・農学１）	１名（中国）

には途中で受講を取りやめる学生が少なくない。これは、この科目が留学生にとっては自由選択科目であることが１つの原因であり、「多文化交流科目」全体が抱える制度上の問題の１つだと言える。

1.3　授業の目的

まず、シラバスに示した授業の目的は以下のとおりである。

日本人学生と外国人留学生が、社会に直結する身近な言語現象をトピックとして協働的な相互学習を行うことで、母語をはじめとする世界の諸言語をより客観的かつ有機的に捉える能力を身につける。

あわせて、以下のような到達目標をかかげている。

(1)　話し手の属性、場面、ジャンルによって変化する日本語のバリエーションを取りあげて、世界の諸言語と対照しながら、各表現の特徴をより深く理解する。

(2)　ポライトネス･ストラテジーの観点から日本語の待遇表現を考察し、多様な「配慮」の形について幅広く理解する。

(3)　さまざまな定型的、慣用的な表現を整理し直し、日本語が持つ普遍性と独自性への理解を深める。

以上のように、本授業は日本語を上手に使いこなすためのスキル重視の科目ではない。言語について考え、言語行動についての気づきを得るという学問的な興味をもとにした実践である。一方で、この授業では、グループワークや調べ学習､発表などを主な実践の方法としており､新渡戸カレッジのカリキュラムとして「多文化交流科目」が目指す「チームワーク力」「多文化状況の中での問題解決能力」といった汎用的能力を高めていくことを授業目標のもう一つの柱としている。初回の授業では、学生に「できるだけ言葉に敏感になり、みずからの気づきを促す」､「互いをリソースとして活用し、世界の諸言語への理解を深める」という２つを常に心がけるように伝えている。

1.4　授業の内容

本授業では、社会言語学的側面からことばを観察する。よって、文法や音声などの言語内要素ではなく、実際の社会の中でことばがどのように使われるのかに注目し、人間の言語行動に影響する言語外要素を主な考察内容として取りあげる。大きくは､「属性」「場面」「表現」という３つのテー

マに分けて順番に進めていく。その中で具体的に扱うトピックは、以下のとおりである。

(1) 属性によるバリエーション：女性語・男性語、若者言葉、世代差、地域方言、役割語

(2) 場面によるバリエーション：敬語、敬語に頼らない丁寧表現、言外の意味、ポライトネス・ストラテジー

(3) 表現によるバリエーション：ジャンルと表現構造、ことば遊び、二義文、重複表現、コロケーション、オノマトペ

次章では、本実践の方法について、直近の2014年度後期の授業内容を中心に詳述する。

2. 実践の方法

2.1 授業の流れ

大まかな授業の流れは、以下のとおりである。なお、下記の実践は、トピックごとに２週２コマで構成されている。

(1) まず、事前に教員から各トピックに関連するキーワードが提示される。それをもとに、学生は各自教室外で調べ学習を進め、オンライン上で学生同士で情報共有と意見交換を行う。

(2) １週目の授業では、オンライン上で共有された情報をもとにクラス全体でブレインストーミンクを行い、続いて教員がトピック関連の講義を行う。その後、学生はグループ別に分かれて発表に向けてのリサーチクエスチョンを決め、発表内容の流れと、それに必要な情報について具体的に話し合う。

(3) １週間の間、オンライン上でグループ別に準備作業を進め、２週目の授業でＰＰＴを最終的に完成する。

(4) グループごとに発表と質疑応答を行う。授業終了後、教員と他グループからのコメントをもとに事後調べを行い、その内容をまとめた報告書を提出する。

ちなみに、１つの活動が完結するまでの大まかな時間配分は、ブレインストーイングを含む講義に40分、リサーチクエスチョン選定のためのグループワークに20分、ＰＰＴ作成のためのグループワークに30分、質疑応答を含む発表に40分を当てている。

本実践は、学生同士のグループワークと、とりまとめ、発表が中心とな

るので、学生の積極的な態度と自発的な発言が不可欠である。あわせて、留学生に対しては、日本人学生と対等な立場での協働学習が可能な、上級以上の日本語理解力と表現力が要求される。初回の授業では、以下の内容をグループワークの際の心構えとして伝えている。

- 協働活動における義務と権利を常に意識する。
- 論理的に考えることを心がけ、全体での議論の質の向上に貢献する。
- 教員は場とネタを提供するだけ。活動の効果は、学生自身がどれだけ真剣に取り組んだかで決まる。

以下では、上記の(1)〜(4)の授業の流れについて、実例をあげながら細かく述べていく。

(1) キーワードの提示と事前調べ

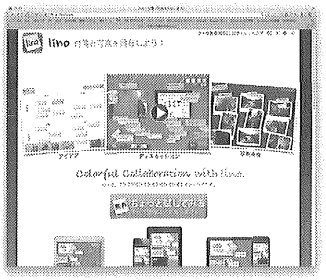
教員は、新しいトピックに移るたびに、そのトピックに関連するキーワードを提示し、学生個人による事前学習を促すとともに、クラス全体によるブレインストーミングの活性化に努める。【表2】で実際に学生に示したキーワードを2つ紹介する。

【表2】トピック別キーワードの例

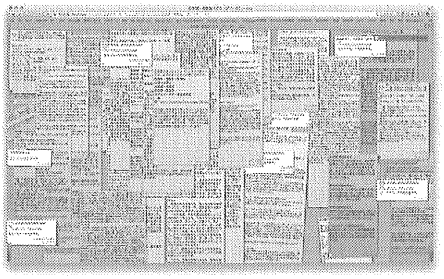
トピック	女性語・男性語 (属性によるバリエーション)	丁寧表現 (場面によるバリエーション)
キーワード	・オネエ言葉 ・一人称代名詞/終助詞 ・リポートトーク/ラポートトーク ・ポリティカルコレクト ・マングリッシュ	・尊敬語/謙譲語/丁寧語/美化語 ・相対敬語/絶対敬語 ・ぼかし表現/言いさし表現 ・社会言語能力

学生は翌週の授業日までに、これらのキーワードについて調べ、互いに調べた情報やそれをもとに考えた意見などをオンライン上で共有する。その手段として、本実践では「lino」というウェブサイトを利用している。「lino」とは、オンライン上に作ったキャンパスに付箋でメモを貼ったり、写真やファイルをアップロードしたりしてメンバー同士で情報を共有するサイトで、「オンライン伝言板」と考えるとわかりやすい(「linoとは？」http://blog.linoit.com/ja/tour/を参照)。以下に、「lino」のホーム画面の【図1】と、実際に本実践の中で作って学生同士で共有・活動したキャンパス画面例の【図2】を示す。

たとえば、【表2】に示した「丁寧表現(キーワード)」のキャンパスに



【図１】linoのホーム画面



【図２】実際の活動画面

は、「私は美化語の法則について調べました（後略）」といった形で、個別に調べた文献やネットで検索した情報を整理して貼る学生もいれば、「相対敬語の例と個人的な考え（後略）」「日本語の乱れとして問題視されているということを初めて知りました」といった形で、調べた情報をもとに自分の理解や感想を述べる学生もいる。

⑵ 講義とグループ別のリサーチクエスチョン選定

１週目の授業では、まず前の週に提示されてlinoで共有したキーワードを素材にクラス全体でブレインストーミングを行う。トピックについての学生の共通理解が形成された段階で、教員からトピックに関連する講義を行う。講義の最後には、講義内容をもとにして教員自らが【表３】のようなリサーチクエスチョンを例示する。

グループは毎回くじ引きでランダムに決まり、各グループにはiPadが１

【表３】リサーチクエスチョンの例

トピック	女性語・男性語 （属性によるバリエーション）	丁寧表現 （場面によるバリエーション）
リサーチクエスチョン	・男性語・女性語の変遷（意識を含めて） ・日本における女性語のイメージは？ ・言葉の性差は翻訳過程でどう扱われるか？ ・オネエ言葉はパフォーマティブな演出か？ ・日本語によるセクシストランゲージの例 ・日本のポリティカリーコレクトの実態	・日本語と他言語の敬語はどう違うか。 ・敬語に対する意識や使い方は変化しているか。 ・「お」と「ご」の使い分けの基準は？ ・日本語の定型表現に特徴はあるか。 ・丁寧に言うためにどんな方略があるか。 ・不快感を与える表現の原因は何なのか。

台配られる。学生は講義内容を手がかりとしてインターネットで関連情報を検索しながら、リサーチクエスチョン選定のためのグループワークを行う。グループは３～４名を基準とし、ＰＰＴ作成と口頭発表、報告書作成といった全過程における役割分担も学生が自主的に行う。

(3) 発表準備とＰＰＴ作成

グループで話し合った結果をもとに、次の授業までの間、学生は発表に必要な資料を個別に調べつつ、オンライン上でメンバー同士の意見交換を行う。このような教室外作業を通して、グループ別に発表準備を進めていく。２週目の授業では、さっそくグループ別に分かれて発表準備を続け、ＰＰＴを仕上げて口頭発表の流れを最終チェックする。これまでの実践の様子を見ると、作業が慣れてくるにつれて、ほとんどのグループがＰＰＴの草案を教室外で作成して事前にオンライン上で共有することで、教室内での作業時間の節約に努めていることがわかる。

(4) 発表と報告書

２週目の授業は、前半がＰＰＴ作成のためのグループワーク、後半がグループ別の発表と質疑応答、自己・他者評価という流れで行われる。発表時間は、他グループからの質疑応答を含めて10分と定めている。あわせて、学生間の相互評価の方法として、全学生には「自己評価シート」と「他者評価シート」の提出を義務化している。評価項目については次節で詳しく述べる。授業終了後は、発表時に寄せられたコメントをもとに事後調べを行い、代表者が報告書を作成する。報告書についても次節であらためて述べることとする。

ここまでで１つのトピックについての一連の実践が完了する。授業の最後に、教員は次のトピックのキーワードを学生に提示し、linoに新たにキャンパスを作って学生からのカキコミを促す。学期全体では、前後のオリエンテーションとフィードバックの回を除く13～14週の間、６～７つのトピックを扱うこととなる。

2.2 授業の評価

学生に周知している評価内容は「事前準備20%、グループワーク参加度20%、発表20%、報告書20%、出席状況20%」である。事前準備と出席状況以外はグループに対する評価で、同じグループであれば評価も同じである。以下、それぞれの評価方法について詳しく述べる。

(1) 事前準備（linoへのカキコミ）

トピックごとに、「キーワード」と「グループワーク」という２つのキャンパスをlinoに作り、前者については個別作業中心、後者については協働作業中心の内容でカキコミ活動を行う。評価に反映するのはどれだけ積極的にカキコミを行ったかであり、カキコミ内容の質や達成度は考慮しない。よって、評価の20％はもっぱらカキコミの回数を相対的に数値化したものとなる。

(2) グループワーク参加度（自己評価）、発表（他者評価）

グループ別の発表が終わると、各グループに対する評価シートを全学生が作成する。自グループについては「自己評価シート」、他グループについては「他者評価シート」をもって評価する。まず、「自己評価シート」には、個人の貢献、協力的な関係、平等な参加、発表の出来、質疑応答、時間の管理という６項目について、それぞれ５段階評価で記入してもらい、別途自由コメント欄を設けている。また、「他者評価シート」には、トピックの斬新さ、十分な情報提示、論理的な展開、内容のわかりやすさ、質疑応答、時間の管理の６つが評価項目となっている。文末の【資料１】に両評価シートの様式を示しているので参照されたい。

(3) 報告書

発表終了後、「他者評価シート」に各学生が記入したコメントを、教員がグループ別にまとめてlinoに書き込み、その内容をみんなで共有する。そして、このコメントをもとに学生はもう一度グループごとに事後調べを行い、その内容をグループの代表者が報告書としてまとめてlinoにアップロードする。報告書の書き方については、初回の授業で資料を配付し、様式の統一と質の維持を図っている。文末に、学生に配付した「作成要領」の【資料２】と「サンプル」の【資料３】を示しているので参照されたい。学生には常に、報告書の作成において「内容の一貫性、論理性が重要」であることと、「引用の仕方、参考文献の書き方に注意」することを強調し、評価の判定基準としている。なお、提出された報告書は翌週にコメント付きで返却しているのだが、学生による授業評価アンケートに、「報告書に先生がコメントを書いてくれたので自分のくせや悪いところがわかってよかった」といった自由記述があるところから、ある程度の成果が認められる。

(4) 出席状況

本授業は出席70%以上を最低合格基準としている。しかし、実践の全過程がほとんど学生同士の協働作業によって成り立っているため、出席状況は、最低基準をクリアするだけでなく、より厳しく適用すべきであると考える。よって、欠席や遅刻に対するペナルティを評価項目の1つとして別に設け、学生にもその主旨を伝えている。

3. 実践の成果と課題

3.1 授業の改善

ここでは、本実践の質を向上するために、今まで行ってきた改善策について述べる。

(1) 情報共有サイト「lino」の導入

現在では本実践の協働学習を支える方法となっている「lino」だが、初年度の2013年度前期にはまだ導入しておらず、学生間の意見交換は教室内活動に限られていた。しかし、週1コマ90分という授業時間だけではなかなか議論が深まらない上に、1週間の時間的な空白があるとさらに議論に時間を要することとなる。lino導入には「時間の節約」と「議論の活性化」という2つの目的がある。つまり、個別の調べ学習の過程を教室外で共有することで、議論の時間を節約するとともにより中身を深めていこうという意図からである。

導入以降の授業評価アンケートには、「linoも勉強に役に立ちます」「lino上で話し合うため、対面式ではない難しさがあり、面白かった」といった肯定的な評価が多い中、「議論にはなかなか使いづらかった（議論の進行順があとから確認しにくい、メモを貼り付けていくと重なってしまい前のメモが見にくいなど）ので、そこは改善した方がよい」という否定的な意見もあり、今後も改善の余地があると考える。

(2) 時間配分の見直し

2013年度は、1つのトピックを1週1コマの中で完結する方式で実践を行っていた。当初は、ＰＰＴを使った発表は行わず、教員の講義の後、グループ別に分かれてリサーチクエスチョンを決めると、さっそくiPadで情報を検索しながら話し合いを行い、そこでまとめた内容をその場で代表者が報告する方法であった。

前の週にキーワードを提示し、個別に情報収集をしてくるように義務づ

けていても、学生によってはその場しのぎでグループワークを終わらせてしまうこともあり、内容的な質の保障が難しいという問題があった。なお、教員の講義時間が十分に確保できず、トピックについての学生の共通理解が形成されないままグループワークを行うこととなり、なかなか議論が盛り上がらないという問題もあった。

授業評価アンケートにも「全体的に90分の授業では足りないです」「ディスカッション時間のコントロールをもっとした方がいい」「先生の説明をもっと入れたらいい」などの意見があった。そのため、2014年度前期から、取りあげるトピックを合体または省略して、１つのトピックについての実践を２週２コマで行うことにした。それと同時に、学生同士の議論を深める方法として、グループワークの内容を「リサーチクエスチョン選定のための話し合い」と「発表のための話し合い」に二分割して情報収集と議論の時間も十分確保できるようにした。

(3) 「評価シート」の導入

グループワークの時間を増やして２段階構成にするとともに、口頭による報告ではなく、ＰＰＴを用いた発表を取り入れることになった。それを機に、学生がより主体的に実践に関わるための仕組みとして、評価シートを導入した。前述したように、自己評価では、「個人の貢献」「協力的な関係」「平等な参加」など、協働学習において重要な個々人の姿勢、それにもとづく議論の過程を主な評価対象としている。一方、他者評価では、「トピックの斬新さ」「十分な情報提示」「論理的な展開」「内容のわかりやすさ」など、発表内容の質と出来映えを主な評価対象としている。本来、協働作業やプロジェクト重視の授業の場合、学習の成果を明示化することが難しい。自らグループワークの過程をふり返り、確認・分析した上で評価シートを作成することで、学生が実践の意義と効果をより具体的に認識することができると考える。

(4) 中間フィードバックの強化

教員はこれまでも、活動促進に役立つコメントをその都度ＰＰＴで提示したり、提出された報告書にコメントを書き込んだりして、常に学生へのフィードバックに努めてきた。しかし、このような内容的なフィードバックだけでは、積極的な活動のための学生の動機付けに直接つながりにくい。よって、2014年度前期からは、最初に告知した評価基準をもとに点数化した学生一人一人の中間評価表を配付し、個別にフィードバックを行ってい

る。文末の【資料４】に例を示しているので参照されたい。中間評価表には、個人の成績だけでなく、全学生による平均、最高点、最低点を併記し、学生のモチベーションの向上を図っている。

以上のように、今学期で４回目を迎える本実践では、これまでさまざまな改善策を検討し、導入してきた。しかしながら、まだ解決すべき課題も少なくない。次節では、今後、さらに改善が求められる課題について述べる。

3.2　今後の課題

(1)　内容面での質の向上

前述したように、実践全体の時間配分を見直し、１つのトピックに対して「キーワードについての話し合い」「リサーチクエスチョン選定のための話し合い」「発表準備のための話し合い」「報告書作成のための話し合い」という４つの段階による議論の場を設け、内容面での質の向上を図ってきた。１つのトピックを２週２コマで進めることになってから、事前調べと発表準備により時間をかけられるようになり、学生同士の話し合いにもかなりの時間を当てられるようになったことは確かである。しかし、まだ議論の中身が十分深まったとは言いがたい。たとえば、リサーチクエスチョン選定においても、なかなか深い議論に発展できず、最初に教員が例示した中から安直に選んでしまうことも多々あり、相変わらず学生主体の発想の欠如がうかがえる。また、発表においても、収集した情報から何が言えるのか、分析・考察に重点をおいて議論することができず、単に調べたものを羅列するだけで、内容に一貫性がなく考察が足りない発表も少なくない。内容面で質を保証するためのさらなる対策が求められる。

(2)　学生間の協働学習の促進

前述したように、本実践の目的は、「日本人学生と留学生が協働学習を通して、言語を客観的かつ有機的に捉える能力を身につける」ことにある。そのために、互いをリソースとして活用し、互いの言語への理解を深めていくことが求められる。しかしながら、現在、日本人学生と留学生の人数のバランスが悪いという制度上の問題も影響し、必ずしも学生間の話し合いが十分な相乗効果を生み出しているとは言いがたい。日本人学生と留学生の多文化クラスという制度上のメリットを生かして、学生同士が互いを貴重な情報源として利用し、それにともなう相乗効果が期待できるように、

制度上の改革が必要である。

また、学生のトピックに対する取り組み方、情報の調べ方にも、協働学習の相乗効果を妨げる要素が存在すると考えられる。たとえば、linoへのカキコミは、検索した情報を書き写すだけでなく、発表の役に立つ内容をみんなで作り上げることに、最終的な目的がある。よって、できるだけ身近な話題を中心に自分の視点でトピックを捉えなおすことが大切であり、そうでこそ、グループワークもより活性化し、その結果、協働学習の効果も期待できるのである。しかしながら、学生の活動の様子を見てみると、収集した情報を自分の視点で捉え直すところまで思考が発展できず、互いが収集した情報を確認しあうだけで議論が終結してしまうケースも少なくない。より学生の創造力を掻き立てる仕組み作りが必要だと思われる。

(3) マンネリ化の防止

前述したように、2週2コマで1つのトピックを扱うというタームで実践を進めており、学生は同じ流れの実践を1学期に6～7回くり返すことになる。本来なら、そういうくり返しの中で、論理的に考える力や分析する力、それをわかりやすく伝える力が養われることが期待される。しかしながら、一方で、学生にマンネリ化ともとれる様子がうかがえるのも事実である。議論を深めて発表内容の質を高めようという努力より、「調べやすい」「まとめやすい」という基準でリサーチクエスチョンを選び、できるだけ手間をかけずにまとめようとする傾向が見られるのである。今後は、そういったマンネリ化を防止する方策についての検討も必要である。

資料

他者評価シート

2014.12.18（意外の意味）

グループ色：＿＿＿＿＿＿＿＿　　評価者：＿＿＿＿＿＿＿＿

○「評価」欄は、以下の基準をもとに、5段階評価で数字を記入してください。
5：感動した　4：よかった　3：まあまあ　2：もう少し　1：ダメかな

項目	評価
【トピックの新鮮さ】　設定されたトピックに興味を持つことができたか。	
【十分な情報提示】　発言内容を裏づける情報は十分提示されたか。	
【論理的な展開】　無理な飛躍、主観的な思い込みはなかったか。	
【内容のわかりやすさ】PPTと口頭での説明が適切かつ有効に用いられたか。	
【質疑応答】　質問に対して的確な内容で答えられたか。	
【時間の管理】　発表において時間配分が適切になされていたか。	
合計：（　　／30）	
コメント：	

自己評価シート

2014.12.18（言外の意味）

グループ色：＿＿＿＿＿＿＿＿　　評価者：＿＿＿＿＿＿＿＿

○「評価」欄は、以下の基準をもとに、5段階評価で数字を記入してください。
5：最高　4：よくできた　3：まあまあ　2：もう少し　1：ダメかな

項目	評価
【個人の貢献】　事前準備において、調査と考察は十分にできたか。	
【協力的な関係】議論において、互いの意見をバランス良く取り入れられたか。	
【平等な参加】　作業において、メンバー同士の役割分担はうまくできたか。	
【発表の出来】　一貫性のある有意義な内容の発表ができたか。	
【質疑応答】　質問に対して的確な内容で答えられたか。	
【時間の管理】　グループ別作業において、決まった時間内に余裕をもって作業ができたか。	
合計：（　　／30）	
コメント：	

【資料１】評価シート

「日本語のバリエーション」　　担当：鄭惠先

報告書の作成要領

1. 毎週提出するレポートは、グループワークでの話し合いをとりまとめた内容にその後の調査内容を加えたものとなる。話し合った中でもっとも焦点となった議論は何だったのか（トピック）、授業のあと調べた内容とあわせてどうまとめられるか（結論）を、わかりやすく、簡潔に書く。

2. A4で1ページ。題目は、自分のグループで主に話し合われたトピックと結論をもとに、各自が工夫してつける。また、氏名は、報告書作成者の名前を冒頭に、続いてほかのメンバーの名前を並べて書く。十分な margin をとって、1行40字×40行程度で、フォントは11のMS明朝（題目や氏名、小見出しなどはMSゴシックでも良い）。左上に「日本語のバリエーション」と書き、右端にその週のタイトル（例：「バリエーションとは」「役割語」…）と授業日（例：2013.10.7）を書く。

3. 報告書はWORDかPDFファイルにしてLinoにアップする。ファイル名は、「その週のタイトル（作成者の名字）」とする。報告書は翌週の火曜日24時までには必ずアップする。

4. 事後調査で調べた情報を報告書の中で取りあげる場合、その出典を必ず参考文献に書く。また、直接引用の場合は、引用箇所がはっきりわかるように書かなければならない。
※参考・引用時の注意事項
(1)図書を参考にしたときは、必ず奥付を見て正式な書き方を確認すること。
(2)インターネットのサイトを参考にするときは、必ず検索した日付を記入すること。
(3)インターネットからの情報は「玉石混合」の集まりであるため、むやみに引用しないように気をつけること。
(4)以下のサイトを参照：
「参考文献の書き方」http://web.ydu.edu.tw/~uchiyama/ron/ron_04.html（2014.3.27閲覧）
「Wikipedia:検証可能性」http://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:検証可能性（2014.3.27閲覧）
「Wikipedia:出典を明記する」http://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:出典を明記する（2014.3.27閲覧）

※ 書式の詳細は裏面の「サンプル」を参照のこと。

【資料２】報告書作成要領

「日本語のバリエーション」　　担当：鄭惠先

報告書「サンプル」

「日本語のバリエーション」　　「バリエーションとは」2014.4.10

題目

作成者氏名、メンバー1、メンバー2、メンバー3

1．はじめに
まず、これから何について書くのかを示し、また、このトピックについてまとめるときに、もっとも重視すべき点（または目的）を簡単に書く。

2．本論（←内容が予測できる見出しをつける）
ここでは、グループワークの具体的な内容を簡単に予告する。そのまま2．1に移ってもいい。話し合われた内容をポイント別に分けて、次のように小見出しをつける。

2．1　考察1（←内容が予測できる見出しをつける）
できるだけ具体例などをあげて、読んだ人にわかりやすく、説得力のある文章に仕上げる。その際、事後調査でわかった情報があれば、その内容も一緒に盛りこむ。内容は箇条書きや名詞止めにせずに、段落を持つ完全な文章としてまとめる。

2．2　考察2
できるだけ具体例などをあげて、読んだ人にわかりやすく、……

3．まとめ
最後に、上で述べたことをわかりやすく簡潔にまとめる。その際、1．に書いた目的が達成できたかどうかを考えながら、もう一度内容を確認する。上の内容を根拠としたグループの主張があればそれを書く。

参考文献

太田眞希恵（2011）「ウサイン・ボルトの"I"は、なぜ「オレ」と訳されるのか―スポーツ放送の役割語―」金水敏編『役割語研究の展開』くろしお出版 pp.93-125
小野正樹・小林典子・長谷川守寿（2009）『コロケーションで増やす表現-ほんきの日本語』Vol.1、くろしお出版
「アニメ・マンガの日本語（中国語版）」http://www.anime-manga.jp/chinese/（2012.10.8閲覧）

【資料３】報告書サンプル

	評価シート 35点中	報告書 30点中	lino 回数
○○(氏名)	28	17	14
平均	30	17	14
最高点	32	21	43
最低点	28	14	7

【資料４】中間評価表の例

ちょん　へそん（留学生センター准教授）